Back Number

本論文は

世界経済評論 2022 年11/12月号

(2022 年 11 月発行)

掲載の記事です

世界経済評論 定期購読のご案内

年間購読料
1,320円×6冊=7,920円 ▶ 6,600円 税込

17% 送料無料 OFF

富士山マガジンサービス限定特典
定期購読期間中
※通巻682号以降
デジタル版バックナンバー 読み放題!!

世界経済評論　定期購読

[24時間・年中無休]
0120-223-223

お支払い方法
Webでお申込みの場合はクレジットカード・銀行振込・コンビニ払いからお選びいただけます。
お電話でお申込みの場合は銀行振込・コンビニ払いのみとなります。

Fujisan.co.jp
雑誌のオンライン書店

沼沢地，海浜湿地

佐藤 紘彰

日本では『ザリガニの鳴くところ』と訳されて「本屋大賞」を受けたらしい小説「Where the Crawdads Sing」は，2018年出版後，New York Times紙のベストセラー・リストのハードカバーの部，ついでペーパーバックの部でも第一位を占めている。

著者ディーリア・オーエンズ（Delia Owens）は動物行動分野で博士号を取得したあと夫とアフリカに移って住み，カラハリ砂漠のことを本に纏めたり，動物関係の専門雑誌に寄稿していたというから，初の小説が大当たりになったわけだ。主人公の少女が独りで海辺に住みながら生活に資する周りの貝などの絵を描き，その説明に独自に学んだラテン名を添えて本に纏めて大成功をするというのも，作者の専門知識を入れた。

このロマンの背景はノースカロライナの架空の海辺の森と近くの町，時代は大戦後。ぼくは妻と同州とその南のサウスカロライナ州の海辺で1980年代から25年ほど毎年夏休みを過ごしたが，その間，海岸沿いの地域は毎年驚くほど「開発」をされ続けた。それでも，3，40年それ以前の，小説の描くような，少女が一人で成長する苫屋をひっそり潜めた浦を頭で描くことはできなくはない。

MarshとSwampの相違

面白いのは冒頭でmarshとswampの違いを説く点だ。The New Yorker誌にアニー・プルー（Annie Proulx）の記事「沼はそのままやらせておきさえすれば温暖化から守ってくれる」（Swamps Can Protect Against Climate Change, If We Only Let Them）が出て（7月4日号），そのことを思い出した。

プルーはオーエンズと逆に，まず小説，短編などでいくつもの賞を受けた人。うち短編「Brokeback Mountain」は受賞したばかりか，Lonesome Doveで名高いLarry McMurtryやDiana Ossanaを脚本に，李安を監督に得て映画化，アカデミー賞その他の賞を得た。男二人の愛を描く悲劇である。

この記事は，ぼくがプルーによるフィクション以外の文章を読む最初であった。見ると，これは間もなく本として出る「Fen, Bog & Swamp」の要点を纏めたものらしい。副題は「泥炭地破壊と温暖化危機におけるその役割の簡単な歴史」とする。

プルーはmarshとswampの特別の区別をつけず，前者は葦や蘭が生え，後者は木や低木が生えているとのみ記す。環境省はwetlands（湿地）をmarshes, swamps, bogs, fensに分けるが，プルーはこれらがfen–bog–swampの段階で進むとしているから，それは当然だろう。

今の湿地帯は氷河時代の名残り

湿地は動物や植物など生き物に不可欠である。ところが，「現代のアメリカ人の多くはswampsを毛嫌いし，人に言われて，あるいは強制的にそれに足をいれると，不安と苛立ちと混乱，また不満を覚える」とプルーはいう。ただ，そういう人でも，多くは「湿地が土を清浄することをぼんやりながら理解している」

「湿地はCO_2を吸い取る炭素吸収源であり，人糞や腐った動物の残すもの，また化学薬品その他の汚染物を濾過するうえで他に比類がない。また地下の帯水層を取り替え，地域の水資源を維持し，旱魃と洪水の過分の部分を和らげる。総じて，地球の水分部分は気候を安定させる」

アメリカにはかつて膨大な湿地があった。それは北アメリカ大陸の地勢の形成に氷河時代が大きな影響を残したせいだ。氷河時代にはこの大陸は大きく分厚い氷床に覆われていたが，氷河時代が

終わり始めて氷床が溶けて氷河になって南に移動し出した。それが削って残した痕が，たとえば五大湖だという。ついでながら，ニューヨーク市から東に延びるロング・アイランドはそうした氷河が溶けて残した砂の山だそうだ。

ところがアメリカがイギリスから独立し，合衆国として東岸の13州として始まると，間もなく領土の拡大を始めた。1803年の（フランスからの）「ルイジアナ買収」はメキシコ湾からカナダに至る地域を収得，領土は2倍になった。1819年はフロリダとオレゴンの一部を買収，1845年はテキサスを合併，翌年のオレゴン条約で太平洋岸カリフォルニア北部からカナダの南部境まで収得，云々。

それとともに，イギリスから，ついでヨーロッパから移民が急増，人口が西に移動するとと湿地を不倶戴天として排水・干拓に集中，1849年，連邦議会はこれを国是として法制化した。その結果イギリス・ヨーロッパの移民が始まる前の17世紀初めには2億2100万エーカーあった湿地は1億300万エーカーに激減した。これはアメリカ魚類野生生物局の1990年の推定である。

2億2100万エーカーは89万5000平方キロメートルに当たるから，日本全土の2.4倍に相当する。

最高裁判決

これで思い出す。ジェトロ・ニューヨークで働いていた頃のぼくの報告分野の一つは最高裁判決だったが，2006年6月，水質汚染防止法に関わる訴訟に対する判決があった。その報告で，「湿地は，人類史で見ると，人間生活にとって不便・不適なものとして干拓され，農地や住宅地や商業不動産に変貌せしめられてきた。その点，米国は大半の国と同じであって」云々と報じていた。日本では依然物議を醸している諫早湾干拓，戦前には巨椋池干拓があった。

2006年の最高裁判決は5対4で不明確ながら，1972年の「水質汚染防止法（Federal Water Pollution Control Act」通称「清水法（Clean Water Act)」の緩和に向けての動きを見せていた。

「清水法」は，当初，河川・湖水・沿岸海域への汚染物流出を阻止・削減し，水質をもとの状態に回復することを目的としていたが，それを徐々に対象を湿地の保護，ひいては湿地の再生計画に広げていた。そして，1988年には「差し引き合計損失ゼロ（no net loss)」政策が導入され，農地や住宅地の開発などで湿地が失われた場合，それに相当する面積を新たな湿地を作って補わなくてはならないことになった。

もちろん，このような規制は強力な反対を受ける。反対がなくとも，趨勢として湿地は減少を続ける。法制により1980年以後20年は湿地の喪失率は大きく減少したが，ぼくの報告の2006年の報告時点でも，毎年湿地8万エーカーが失われていた。これはマンハッタンと同じ大きさの湿地が5つ半ずつ失われていたことになる。

世界的に続く減少

世界的に見ると，ここ20年に毎年平均200平方キロメートル（5万エーカー）の湿地が失われたとThe Nature Conservancy（2022年5月）が報じている（情報元はGlobal Intertidal Change)。この場合湿地は『ザリガニ』の主人公が住んだような潮間帯湿地に限られているが，「これら湿地の重要性は言いすぎることができない。植物の生える湿地は炭素を恒久的に閉じ込める地上唯一の生態系ばかりか，暴風雨から人間を守り，上がる海面とともに高まる上，無数の魚を育てる」という。

潮間帯湿地の喪失をいくらかでも抑えているのは自然増加（4分の3）と人間による湿地回復（4分の1）による。

プルーは，その記事で，マングローブを含む湿地回復努力にも触れている。

さとう　ひろあき　翻訳家，コラムニスト在NY